



救ってくれ ありがとう

【栃木県】高橋 久 70歳

「もう少しで駅に着くから、メールして」。家族と落ち合うため駅に向かう車中、助手席の妻に話し掛けた。

令和元年12月初旬のことだった。「おい、どうした」。声を掛けても返事がない。

妻を見ると、よだれを垂らし、目を開けたまま意識を失っていた。これは大変だ、4年前の脳梗塞の再発かもしれない。悪夢が頭をよぎる。

車を道路わきに寄せ停車し、妻の体を何度もゆすり、「幸子、幸子、幸子」と大声を掛けても反応がなく依然として意識がない。

急ぎ119番通報し事情を話すと、電話口で「顎を上げ気道を確保し心臓マッサージをしてください。

やり方は……」。頭の中は真っ白、パニック状態。

助手席の座席を倒し、ただ名前を呼びながら、左胸を強くさすることしかできなかった。

どうしよう、どうしよう、心細くなり、半泣き顔になっていた。

とその時、母娘らしい2人が近づき、娘らしき人が「私、看護師です、代わります、大丈夫です」と言ってくれた。

地獄で仏に会ったようだった。救急車が到着し、「車内に収容します」とのこと。

車を洋品店の駐車場に借りられるようお願いに行き、戻つてくると妻は収容されていた。

車を移動、戻ると「旦那さんも乗ってください」とせかされ同乗。

その時、2人の母娘の姿はなかった。名前を告げず立ち去ったという。

総合病院に搬送され、数時間の診察治療後、「落ち着いています、もう大丈夫です、直後の措置が適切だった」と言われ、自宅近くの病院で治療するために帰宅できた。

当時は思い出すたびに、あの看護師さんに心からのお礼を伝えたいと思ひ、S新聞社にお願いした。12月中旬、新聞に大きく掲載された。

「救ってくれ ありがとう」
「通り掛かりの女性看護師、妻に心臓マッサージ」

「栃木の夫婦 名前聞けず」
掲載日の夜、新聞社に連絡を寄せたのは、20代の若き女性看護師だった。